

巻 頭 言

花木ブームと北海道

久保田泰則

ごく最近、この20年来、花木、庭園樹の栽培と育種を手がけている神奈川県立フラワーセンターの増殖指導課長に会った時、北海道には道内産の花木等がないので、本州の花木生産業者、取扱業者は、三、四月の最も荷動きの盛んな時期を過ぎると品質不良のもの、生産過剰で余ったものが売れ残り、例年その処置に困っていたが、最近はそのを北海道に持って行けば殆んどさばけるので大喜びしているという話をしてくれた。これらは本州方面で栽培される園芸物で、北海道の寒さや風土にはまず不向きで枯れてしまうものが多く、そのため毎年どしどし売れ、北海道は最良の市場だと言う。

これは北海道のわれわれにとっては有難くないことで、当試験場でもこゝ数年来努力して来た道内の露地で生育が一応保証できる道産のツツジ、シャクナゲ等の低木類の品種、銘柄と、その特性、栽培方法を早く確立して道内需給に応じなければ北海道の人達はいつまでも馬鹿をみることになる。

しかし、本州産のものは色彩、樹形、葉など観賞価値の高いものがすでに沢山つくられ美を競っているのに、そういうものに眼が馴れている道内の人々は、たとえ道産で栽培が容易であろうと観賞価値の劣るものはなかなか進んでくれ難いのではないかという懸念がある。まして道産の樹種、品種の供給先を本州方面にまでと拡げて考えると、これはなかなか容易でない。

現在、道内でも過疎、農業振興対策などとして、少なからぬ自治体、団体が道産の花木類の生産に取り組んでいるが、その殆んどが、山取りと実生によると考えられる。現時点では作れば売れるというブームの中での生産であるのでこれで一時の対応はできるであろうが、道内、国内の需要が近々のうちに埋まってしまえば、二束三文のものを作ってしまうことに間違いない。決して甘い期待をもって思惑作りをすべきでなく、樹種、品種は少なくとも確実に本州方面の既往品種と太刀打ちできるものを生産対象とするべきで、その意味で生産者は早く実生から脱皮して、挿木等の無性繁殖により銘柄品種の固定したものを量産するように切り変えて行く必要がある。そのためにはその母材を作りあげねばならない。

もう一つ、現在のブームは個人の趣味、愛好を越えた、規模の大きい公共的な緑地、庭園、街路樹作りに高木が大量に使われている。以前からも植木屋、造園業者は少なからずいたが、その技術は職人の手先に頼る伝統的な慣行技術で、決して間違いのあるものではないが、現在のような量的にこなす事態には間に合わない。量的拡大が現在のような所まで進展すると、高木の移植した木がむぎむぎ枯れたり、原木を山取りに求めるため、自然の破壊、山荒しの非難が府県によっては出始めているというし、濡手で粟式の発想で山取り木を市場に出し、その樹形、根造りの悪さで事業費もでないまでに買った、かれたというある県の技師の嘆きは、まだ需要の盛んなわが北海道にとっても他山の石としなければならぬ。 (造林部長)